

第 2 章

企画報告

Bomas of Kenya

8月18日

ケニアの文化を学ぶフィールドワークとして **Bomas of Kenya** を訪問した。ケニアには、キクユ、ルオ、ルヤなど多くの民族が存在し、それぞれが独自の歴史や言語、文化を持っている。**Bomas of Kenya** は、生活様式や音楽、ダンスなどケニアの文化の様々な顔を見ることができる場所である。

“**Bomas**”という語は、「囲まれた家屋敷」を意味するスワヒリ語の”**Boma**”に由来する。**Bomas of Kenya** には、各民族の伝統的な暮らしを再現したいくつもの”**Bomas**”が存在する。私たちは、この模擬村を歩いて回り、それぞれの特徴を学んだ。全ての村が違った特徴を持っているので、比較してみると面白い点がいくつもあった。例えば、住居の大きさにおける違いである。ある民族の村では、主人の家が最も大きく、次に第一夫人、第二夫人という順であるが、別の民族の村では、第一夫人の家が非常に大きく、主人の家が小さく貧相に見えるということがあった。

模擬村を見学した後、伝統的な音楽とダンスのパフォーマンスを見た。全ての音楽、ダンスに重要な意味がこめられており、それぞれの民族にとって価値のあるものであると教えられた。しかし、近年は、都市部で生活する人々が増え、伝統的な暮らしや文化は姿を消しつつあるとのこと。経済が

発展し、都市化が進んでいる今こそ、ケニアの伝統的な、価値ある文化を保護していかなければならない時である。

(担当：安部美里)

国立公文書館

8月19日

異なる文化のもとで創り出された芸術は、経済活動や宗教など生活の異なる様式を表現している。これらは、異なる場所に暮らす人々にはどのような違いがあるか、異なる民族間にどのような違いもしくは類似点があるか、などを私たちが考える機会を与えてくれる。

国立公文書館はナイロビの中心部、人で溢れかえるトムボヤ通りに面し、有名なヒルトンホテルの目の前に位置する。書類、写真、そしてケニア共和国とアフリカ全土に関連した歴史的な芸術を展示している。訪問中、私たちは展示されていた芸術の収蔵品と写真を見ることができた。収蔵品は、当初はケニア共和国第2代副大統領ジョセフ・ムルンビのものだった。彼はアフリカの旅行中に多くの作品を収集した。これらの作品の展示は公文書館のムルンビ・ギャラリー部門に収められていた。

展示は印象的なものが多く、ケニアの原住民族によって使われていた武器、日々の生活に使用する家具、装飾品、古代から現代までの芸術作品などがあった。さらに、

植民地時代から現代にいたるまでのケニアの発展についての展示では、写真付きの新聞を用いてケニア政治史の重要な場面を強調しながら紹介していた。

国立公文書館の訪問は、実行委員にとって貴重な学びの機会となった。さらに、アフリカの文化を将来の世代に伝え、貴重な財産を残すための多大な努力を感じるものであった。

(担当 : Don Handa)

ナイロビ市内散策

8月19日

ケニア側実行委員にナイロビのダウンタウンを案内してもらった。日本での事前調査の際、「ダウンタウンは危ない」という意見を頂いていたため少し不安だったが、実際行ってみると東南アジアの都市と人の多さなどはあまり変わらなかったと言える。

その中で最も印象に残ったのは公共バスだった。日本の道と比べて凹凸がかなり多いため、バスがスピードを出せば出す程揺れも大きくなり、窓から放り出されそうになるほどであった。また、ナイロビ市内を一望できる展望台に登った。そこにはたまたま私たちより先に小学生が大勢おり、日本人である私たちを見かけるや否や、取り囲まれ次々と質問を浴びせられた。小学生の迫力に圧倒されたものの、貴重な経験になった。ランチには庶民的な食堂でケニ

ア風ケバブとフライトポテトを食べた。気取らない庶民の食堂であるため値段も日本に比べれば相当安く、経済的であった。

概して、ナイロビの街は日本とは異なる発展途上国特有の雰囲気を持っていた。歩いているだけで活気を肌で感じられるような街であり、日本に戻れば恋しくなること間違いのない街であった。またいつの日かケニアを再訪できることを心より願っている。

(担当 : 張文博)

Pa Ya Paa アートセンター

8月21日

Pa Ya Paa アートセンターの訪問は、分科会活動の「芸術と文化」に関連した活動であった。訪問の主な目的は、センターがどのように運営されているかについて理解を深めることと、様々な形態が存在する芸術に対するケニア人の考えを知ることであった。

Philda Njau 館長が私たちを迎えてくださった。まず初めに、センターの歴史について説明を受けた。センターのロゴは亀をモチーフにしている。これはセンターの姿を亀の歩調に例えているからだ。数十年前から存在するが、多くの人に知られている施設ではなく、進展がないようにさえ見える。しかし、いつか多くの人がセンターの進展と変化する姿に気づくようになってほ

しいという願いを、このロゴに込めていると館長は語った。

次に、センター内を案内して頂いた。ケニアの様々な芸術家の作品を鑑賞した。センター内を見学する間は多くの質問をする時間があり、館長は多くのことを答えてくれた。壁に展示する芸術作品の選定は、経験豊富な芸術の専門家によって行われる。館長はそれらの芸術作品を手に入れて、センターを毎日運営し、そして芸術作品の買い手とアーティストの間の仲介役になっている。

私たちは石の彫刻、絵画、壁画、木製の彫刻に至るまで様々な芸術作品を鑑賞した。作品には、宗教、政治、愛、平和など様々なテーマを反映したものがある。また、私たちが鑑賞した作品の作者の年齢は6歳から60歳と幅広かった。本当に様々な作品が存在しており、古さと新しさをうまく融合したセンター内の全てが素晴らしく、例えば、展示室だけでなく中庭の空間でさえ自然と芸術の間の精巧な調和が保たれていた。

センターには Jimmy Carter、Lauren Hill、Sidney Portier など、多くの著名な芸術家が訪れる。また、自発性と独創性のあるイベントを不定期に開催し、それらは大成功を収めている。このように、このセンターは美術愛好家からふと興味を持った人々まで幅広い人々を魅了するアートセンターになっている。そして、誰であろうと、その人の興味がどこにあると、Pa Ya

Paa アートセンターは歓迎してくれるということが何より明らかであった。

今回の訪問を快く受け入れて下さった館長やその他のスタッフの皆様には心から感謝している。この訪問によって、私たちの文化の一部を担う芸術の価値を感じる事ができた。

(担当 : Rahab Kihuha)

ケニア側実行委員宅

8月21日

ケニア側実行委員の中の1人の実家に招かれ、夕食をごちそうになった。実家への訪問は日本側実行委員にはサプライズとして用意されており、事前に知らされていなかったため驚いた。訪問先の家族の皆様は日本からの訪問客である私たちを温かく迎えてくださった。その家族は敬虔なムスリムであったので、私たちはケニアの文化とも異なった文化を経験することができた。

1日5回のお祈りをする部屋を見せてもらった。絨毯やカーテンなど家具の模様が美しく、部屋の隅にはコーランが積み重ねて置かれていた。また、日本側実行委員は Kanza、Keffiyeh、Hijab、Abaya などのイスラムの伝統的な衣装を着せてもらった。これらの経験は新鮮で、非常に楽しむことができた。その後、おいしい家庭料理を頂きながら、ケニアと日本の文化について話しあった。

この経験によって、ケニアの国民の多様性を感じることができ、また、日本ではあまり身近ではないイスラムの文化に触れることもできて、とても興味深かった。

(担当：内田あす香)

国立博物館&スネークパーク

8月22日

日本とケニア両国について、より豊かな理解を実現したいと考えたとき、様々な領域の展示物をもつ国立博物館への訪問は私たちの学びにとって素晴らしい機会である。

今回の訪問では、まず初めに、スネークパークを見学した。ここには、一般的なヘビから特定の地域でしか見られない珍しいヘビに至るまで様々な種類のヘビが飼育されている。しかし、スネークパークとは言いが、ヘビ以外の種類の生物も飼育されていた。例えば、カメ、ワニなどである。また、ケニアの有名な種の魚を観察できる水族館がある。大学で日本語を専攻しているケニア側実行委員に日本側実行委員が生物の日本語名を紹介しながら館内を見学し、日本語を学ぶいい機会でもあった。

次に、国立博物館のメインの建物に移動した。博物館ではケニア社会を様々な側面から捉えた展示を見ることができた。展示物はケニアの政治、文化、さらに人類の進化に関するものまで幅広かった。遺跡から発見された化石、写真による植民地から独

立後の発展の歴史、異なる民族グループの工芸品など、ケニアの多様な社会を象徴するような様々な展示物があった。また、ケニア国内や東アフリカ地域で活動する芸術家の作品も展示されていた。国立博物館の中でも存在感のある展示の1つが、アーメドというゾウの骨格模型である。アーメドは生きていたときケニアで最大のゾウとしてよく知られていた。そして、死亡時にその骨格は展示のために保存され、この博物館ではアーメドの等身模型を見ることができる。

この1度の訪問だけで、この博物館にある全てのことを学び、ケニアの歴史や社会の現状について全てを把握できたとは言えない。しかし、この訪問によって、日本側実行委員だけでなくケニア側実行委員でさえもこれまで知らなかった情報と知識を得ることができ、この訪問は私たちが様々なことを知るきっかけを与えてくれた。訪問中に培った知識が、両国実行委員にとって、発展を続けるケニア社会への理解の構築と拡大の出発点となれば良いと思う。

(担当：Don Handa)

ナイバシヤ

8月23日～8月25日

ナイロビから北西に車で1時間半ほど移動したところに、自然に囲まれたナイバシヤという町がある。そこは、大量の人と車

が行き交う賑やかなナイロビとは大きく異なった落ち着いた場所である。その地やそこまでの道のりで初めてケニアの田舎の原風景、人々の暮らしを見ることができた。

また、ナイバシャへの移動の途中で「アフリカ大地溝帯」を見ることができた。アフリカのことを全く知らない人であっても、この地溝帯の名前は聞いたことがある人も多いであろう。中学校や高校の地理の教科書に載っていたが、それを読んだ当時は、日本からの距離を考えると自分には全く縁がないだろうと感じていたアフリカ大地溝帯。いざ、自分がその地に立つと、その壮大なスケールも相まって、本当にアフリカにいるのだなと強く感じさせられた。

ナイバシャでは様々な体験ができたが、最も印象的であったことは、やはり野生動物との出会いである。野生のカバ、シマウマ、サル、そしてキリンまでにも出会えたのである。このことは確実に日本では、いやアフリカ以外ではできない体験であり、非常に貴重な体験であった。動物園で見る彼らと何が違うのか。檻の中でリラックスした彼らと違い、群れで走り回るシマウマ。歩いている姿しか見たことがなかったが、実は馬のように走るキリン。すべてが驚きに満ちていて、日本人全員が常に興奮させられていた。

ナイロビの市内では、まさに急発展していると言える都市の姿をどこへ行っても見つけることができた。反対に、ナイバシャ

での活動中は、自然を感じ、自然の姿に感動した。これから、ケニアはますます発展し得る国であろう。しかし、日本では決して見るできないほどの雄大な自然に恵まれているその姿は、いつまでも残ってほしいと願う。

(担当：奥中郁巳)

David Sheldrick 動物孤児院

8月26日

David Sheldrick 動物孤児院は密猟により母親ゾウを失くした幼いゾウたちを保護するための施設である。現在、密猟の増加によりケニアのゾウの数は徐々に減少している。象牙採取のために母親ゾウが殺され、まだ野生の中では自力で生きていくことができない、残された幼いゾウの死亡が増加している。また、ゾウの数の減少のもう 1 つの原因として、人間との競合が考えられる。人間の数が増え続けると、土地、水資源、牧草地などの資源利用によって人間とゾウが対立する。そして、ゾウが人間の居住地に迷い込んだ際に人間との対立の中で死んでしまうというような結果をもたらす。この施設では入場料として 500 ケニアシリングを徴収し、このような問題に直面するゾウの保護活動へ役立てている。

幼いゾウの名前は彼らが発見された場所にちなんでつけられる。施設に到着すると、そのゾウの世話を担当する飼育員が決

められる。飼育室の中で交代制の飼育員から常に見守られているゾウたちは非常に高いレベルで世話を受けている。ゾウは 1~2 歳の時は完全にミルクに頼って成長するため、その期間中には栄養面を強化したミルクを 3 時間ごとに与えている。また、飼育室で育っている間も、野生の中で生きていく本能を養うために外で数日を過ごす取り組みも行っている。ゾウたちは 2 年半から 3 年の間このように育てられ、その後野生へと戻されている。

この訪問では、ケニアのゾウが直面している問題点を知り、また、その問題を解決して次世代にとって重要な生態系を保全するという立派な試みの現場を見ることができた。

(担当 : Melanie Macoloo)

Paradise Lost 散策

8 月 26 日

ピクニックを楽しむことができるような広い公園となっているこの場所を訪問した主な目的は 2 つあった。1 つは純粋に美しい景色を肌で感じることで、もう 1 つはその景色の裏側にあるその場所の歴史を知ることであった。

まず、滝の隣にある洞窟の探検から始まった。洞窟の入り口付近は明るかったが、奥に行けば行くほど恐怖心は増していった。ある地点で外からの光は完全になくなり恐

怖に包まれた。洞窟の中は湿っていて、少し気味も悪かった。その後、ケニア側実行委員が日本側実行委員に洞窟の歴史的価値を説明した。

ケニアが独立へと向かう時期、マウマウ団の戦士がこの洞窟を隠れ場や怪我を治すための療養所として活用していた。マウマウ団とは、ケニアがまだイギリスの植民地だった頃に反英武力闘争を行なったキクユ族を中心とする民族運動組織である。彼らの活動は独立運動に大きな影響を与えたとされているが、1950 年代のいわゆるマウマウ戦争では、マウマウ団と英国植民地軍が激しく衝突し、同団の戦士ら推定 16 万人が拘束され、強制労働キャンプに収容されていたという悲惨な事実もある。光が完全でない洞窟を訪れたとき、当時の兵士たちが味わった恐怖や不安を少し感じられたように思う。

洞窟を探検し終わった後は、私たちは洞窟の外で滝を眺めた。昼食を取る間も近くの湖の眺めを見ることができ、その景色は素晴らしかった。その後、乗馬を体験し、最初は緊張したものの、すぐに慣れて楽しむことができた。このように、現在は自然が豊かな、非常に美しい場所になっている。しかし、私たちにとって、その場所は大切な歴史を学ぶきっかけを与えてくれる場所でもある。

この活動で、私たちはケニアの歴史を学ぶこともでき、同時に自然豊かな素晴らし

い景色を味わうこともでき、非常に満足できる活動であった。

(担当：Rahab Kihuha)

JICA ケニア事務所

8月27日

JICA ケニア事務所への訪問は、「国際協力」をテーマにした分科会活動の一部として計画された。この訪問の目的は、ケニアにおける JICA プロジェクトの実施方法の基本的な知識を得るとともに、ケニアで可能な国際協力活動についての情報を得ることであった。訪問では、JICA ケニア事務所の丹原一広次長が、JICA に関する講義をしてくださり、その後質疑応答を含めた議論を行った。

講義の前半は、JICA が日本の開発援助の活動にどのような方法で携わっているかを紹介して頂いた。ODA の援助は以下の2つの形を取る。1 つは二国間援助である。二国間援助には、無償資金協力、円借款、技術協力という形がある。ケニアは日本の ODA においてアフリカ地域最大の被援助国であるが、その援助のほとんどを円借款と技術協力という形で受け取っている。日本政府が円借款の形で援助を行うのは、ケニアの現状を見たとき期限内にローンを返済できると考えるからである。もう1つが多国間援助であり、これは国際機関に資金を出資または拠出して開発途上国に対し間

接的な形で援助を行うもので、対象となる機関としては国連開発計画 (UNDP) などの国連関係の機関やアジア開発銀行 (ADB) などの国際開発金融機関がある。このような基本的な知識やケニアでの実際のプロジェクトの概要を知ることは、ケニアにおけるプロジェクトの実施に関して議論をするうえで、非常に有意義であった。

後半は、JICA ケニア事務所で開催されたプロジェクトのなかでも、特徴的なものについて話して頂いた。丹原次長は農業部門、インフラ開発部門、技術協力部門でそれぞれプロジェクトを振り返った。

農業部門の活動で注目したのは、小規模園芸農民組織強化・振興ユニットプロジェクトだ。ケニア経済の重要なセクターである農業において、大部分を占めているのは小規模農家である。その小規模農家が十分な利益を得ることは活気ある農業振興のためには必要不可欠である。このプロジェクトでは、彼らが市場に順応して農業に取り組むために必要な教育を行い、彼らの能力強化を図っている。

インフラ開発部門では、JICA はケニア政府と協力して、ケニアの首都ナイロビの深刻な交通渋滞を緩和するための西部環状道路の建設を行った。さらに、電力安定供給を課題とするケニアでその改善を図るオルカリア地熱発電所の建設、東アフリカ最大の港湾であり貿易の拠点とされるモンバサ港の開発事業も行っている。

JICA ケニア事務所の訪問により、私たちは日本からケニアへの支援について考えを深めることができた。さらに、日本とケニアの持続的な協力関係を実現するためには、日本からケニアへの支援だけでなく、日本が得る利益も存在しなければならないと考えさせられた。この点について私たちの考えを述べれば、ケニアの急成長する経済は日本企業にとって新しい市場となり得る。また、日本は急成長する経済を支えるケニア企業に投資することもできるだろう。

(担当 : Don Handa)

New Life 孤児院

8月27日

ナイロビのキリマニ地区にある New Life 孤児院は New Life Homes Trust によって運営されている孤児院の 1 つである。この孤児院は親と離れ離れになった子供たちの面倒を見ている。ケニアでは孤児の世話をする施設はごく少数であり、それらの施設の多くも HIV ウイルスに感染した子供の世話をするための十分な設備は持っていない。このようにケニアの孤児がおかれた環境は厳しく、New Life Homes Trust はこの問題に積極的に取り組んでいる。

New Life Homes Trust は HIV に感染した子供や、深刻な病気に苦しんでいる子供の面倒を見る。このような子供たちは、私立病院と公立病院のどちらからも施設に預

けられている。そして、里親に引き取られるまで施設で暮らす。

私たちがこの施設を訪問したのは、このようなケニアの孤児の状況を知り、子供たちのために何か活動したいと思ったからだ。訪問時、私たちは少しの食料を寄付し、子供たちの世話をしたり、一緒に遊んだりした。施設の活動のための資金は寄付に依存しているが、寄付だけではなく子供たちとともに時間を過ごすこともこの施設への最も重要な貢献の 1 つであると職員の方が話してくれた。私たちはまさしくこの通りの経験をした。子供たちが午後の時間を過ごす遊び場で 1 時間ほど一緒に遊んで、その後着替えの手伝いをした。この時、遊んでいる場面、体をきれいにして着替える場面、食事をする場面、眠りにつく場面、子供たちの様々な姿を観察しながら、子供たちとともに時間を過ごすことができた。

訪問は短い時間だったが、実行委員は皆、物質的な寄付だけが他人の力になるわけではないと実際に感じる事ができた。このような場所では子供たちと一緒に過ごすということが非常に大切なことである。子供たちが健やかに育つためには大人から見守られていること、健康が保たれることは必要不可欠である。これは、金銭的な寄付だけが支援ではないと私たちが教わったとおり、小さな子供たちが元気に育つための大きな手助けになるだろう。

(担当 : Don Handa)

サファリウォーク

8月30日

ナイロビ国立公園内のサファリウォークを訪れた。そこはナイロビにおける人気の観光スポットの1つであり、私たちのような外国人も含めて多くの観光客がいた。その門の前ではマサイ族(に扮した人?)が、伝統的な民族衣装とアクセサリーを纏い、音楽とダンスで観光客を迎えていた。その近くには驚くべきことに猿がいた。しかも何匹も。体も大きい。彼らはサファリウォークの中で暮らす猿であったが、自由に園外にも出られるようで、日本の動物園等の施設では考えにくい光景であった。

園内で見た光景は私たちの想像とは少し異なっていた。施設自体は動物園ではあるが、日本のそれよりも野生に近い状態であった。エリアごとに雰囲気も変わり非常に楽しめた。それぞれの動物に多くの土地が与えられていて解放感があり、動物たちもリラックスしているようだった。しかも、より動物たちに近づくこともできた。私たちは小さなサバンナにいるように感じた。

動物はライオン、キリン、レオパードなど日本でも馴染みがあるものから、オリックスなど日本ではあまり見かけない種類の動物もたくさんいた。日本とケニアにおける動物園の違いが感じられて、非常に興味深かった。

(担当：奥中郁巳)